東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム　多摩

No. 16
発行
1995年3月1日

ふるさと体験館

――府中市郷土の森の体験学習――

府中市郷土の森博物館
後藤廣史

博物館の教育普及活動については、講演会、講座、体験学習そして刊行物の発行と、さまざまな事業が行われている。博物館の第一義は展示にあるとはいうものの、今日的な開かれた博物館として、これら教育普及的活動に重きがおかれるようになっている近年の傾向も、見逃せないところであろう。

ここでは府中市郷土の森に今年２月にオープンしたふるさと体験館の事業について紹介し、今後の活動計画について若干報告しておきたい。

郷土の森では、博物館本館の体験学習室で大人向けの陶芸教室、子供向けの縄文土器づくり（野焼きは園内）を行い、園内の復原農家では、親子でワラ細工づくり、そして１年間通しての米づくり体験学習・こめっこクラブ、その田んぼでできたお米を使った餅つき大会、また博物館を出て市内各所で行う自然観察会などを行ってきた。これら体験学習事業は民俗、自然、考古、それぞれの学芸員が手掛けていることは勿論である。しかしオープンして８年ともなると、確かにそれぞれの事業の回数が増え、また内容も充実してきたことも事実であるが、何かしらのマンネリ化を感じていた。そこで郷土の森の最大の特徴である、広い園内を有効に活用した体験学習を行うべく、ふるさと体験館を建設し、体験館を体験学習のキーステーションと位置づけたのである。

これまでの体験学習を振り返って感じることは、まず対象が大人または子供などが多く、親子参加型が意外に少ない。郷土の森の利用者は親子連れが多いことでもあることから、親子参加型の事業を考慮すべきと考えた。次に事前申込みが必要である事業が多く、例えばたまたま来館したら、あれこれ事業をやっていて、しかもその場で参加できた、といった当日飛込み参加型の事業を考えること。第３にこれら体験学習のほかに、各種実演を行い、見学の便に供することなどである。

さて平成６年度上期（４月～９月）の体験館事業実績は、次のとおりである。

糸のぼりづくり（平成６年７月）

ここで若干、内容を紹介しておきたい。折紙教室は毎週第４日曜日に実施するもので、年中行事や季節にあわせて毎月の題材を設定して行っている。この定例の折紙教室に、毎回楽しみにやってくる親子連れがみられるようになった。市内文化センターの自主グループ・折紙同好会に指導を依頼しており、毎回数人の講師（５、６人）により、多くの参加者に対しても対応できるものである。フイゴを使った鍛冶屋実演では、体験館で使用できる切り出しナイフやメカイ包丁などを造ってもらっている。紙飛行機は、新聞折り込み広告紙を再利用するもので、リサイクルの問題を考慮している。ドングリごまは、園内で拾ったドングリを使うもので、材料費はかからない事業となっている。

以上のように、有料のもの（材料費程度）と無料のもの、講師謝礼を伴うものと館職員で対応するもの、事前申込みのものと当日飛込み可能なもの、対象を特定するものとしないもの等、

■平成6年度上期・ふるさと体験館事業実績

事業名		回数	人数	備考
実演	①ワラ細工実演	7	710	
	②竹細工実演	7	1,158	
	③風車実演	1	85	
	④竹トンボ(置物)実演	4	755	
	⑤鍛冶屋実演	6	621	
体験学習	⑥折紙教室	6	354	Aa
	⑦風車づくり	1	18	Ab
	⑧竹トンボ(置物)づくり	3	95	Bb
	⑨紙飛行機づくり	6	359	Aa
	⑩ドングリごまづくり	2	101	Aa
	⑪折紙モビールづくり	2	85	Aa
	⑫夏休み親子工作教室	4	206	Ab
合計		49	4,547	

申込み　A 当日申込み　　参加費　a 無料
　　B 事前申込み　　b 有料

あれこれの体験館事業であるが、先述した折紙教室などかなり定着した感があるものの、未だその実施にあたっては暗中模索といったところである。

さて郷土の森では、去る10月8日～10日の3日間府中市制40周年記念事業「伝統芸能と縁日の森」を実施した。この事業は広い園内すべてを活用することを意図したもので、復原建築物では職人の実演を行った。だるま、提灯、和竿(釣竿)、座敷ぼうき、竹籠、鍛冶屋、棒屋の職人を招き、実演してもらったが、例えば茅葺き農家の籠屋実演、商家の格子ごしに見える多摩だるまなど、それなりの雰囲気が醸し出された。一日でこれら実演を複数見ることができることは、利用者にとっても嬉しいことであろうし、また職人の方も、多くの見学者の前で実演ができて力が入っていたようである。そして後継者の問題、また材料手配の問題、道具入手の困難さなど、今日的な職人をとりまく問題を提起できる場となったことは、博物館の役割を果たし得たと考えている。職人の作品を販売することも行ったが、これは利用者にとっても、また職人にとっても双方益になったといえるだろう。そして作るものは違っても同じ職人同志、昼食時に道具のことに話が及び、鍛冶屋を中心とした隣人同士の輪が広がったようである。この職人間のネットワークづくりも当初から意図したものであり、担当者として大変喜ばしいことであった。

さてこの事業をふるさと体験館事業の展開として捉え、来年度も「職人の技と縁日の森」という形でひきつづき実施の予定である。郷土の森博物館らしい体験学習事業を模索しながら、今後とも広く職人発掘等考えているので、ぜひ三博協関係各位から情報をお寄せいただければ幸甚である。

博物館映像に関するシンポジウムに参加して

東大和市立郷土博物館　後藤祥夫

今年は、映画が誕生して100年目にあたる年だそうだ。100年のあいだにその技術は大きな進歩を遂げ、様々な可能性を生み出し、商業映画としての発展だけでなく、歴史・民俗(民族)・生物などの学術研究においても、資料の保存と活用に多大な成果を上げてきている。

当然ながら、博物館が映像という手段を通して、生活・生産における技術や、まつり・芸能・舞踊の所作や、動・植物の生態を記録し、あるいは伝達して、受け手の理解を深める工夫が最近様々に講じられてきており、博物館における映像が果たす役割の比重はますます大きくなってきている。

平成6年6月25・26日の2日間にわたって川崎市市民ミュージアムにおいて開催された『動く映像とミュージアム～21世紀へ向けた博物館映像の将来構想』は、博物館・美術館における映像活用に焦点をしぼったこの種の初めての全国規模のシンポジウムであった。開催のきっかけをつくった映画関係者や市民ミュージアムの学芸員の熱意に応えるかのように、参加者は全国に及び、約200名を数えた。

内容は、1日目、第1部として、坂根巌夫慶大教授による基調報告と映像資料の制作と活用で先進的な実践を行っている国立民族学博物館、京都文化博物館、国立西洋美術館などの事例報告、2日目、第2部は、「博物館における映像　集める・作る・見せる」の4つのワークショッ

プ、そして第3部は、宮田登神奈川大教授の記念講演と民俗、美術、動物などの博物館等に従事するパネラー9名によるパネルディスカッションで構成された。

若干の問題も感じられた。「動く映像」とあえて限定したその理由が不明瞭であった。おそらくはフィルムやビデオの「映画」をその範疇として押さえ、スチール写真などを含めた「映像の概念」の広がりを恐れたものであろう。しかし、現実には様々なメディアの活用による将来の「映像」の可能性は大きく広がっており、事実、美術館におけるコンピュータ映像の活用（ある画家の、世界中に散在する作品の一括鑑賞とか、画面上での絵の合成とか、隠し絵・だまし絵を実際の作品に触れなくても体験できるなどの実践）も事例のひとつとして発表されていた。これは「動く映像」が一般に与えるイメージとは著しく乖離している。また、岩手県遠野市立博物館の民話や、清瀬市郷土博物館の郷土の歴史の紹介に代表されるようなマルチスライドなどは今後も発展していく立派な「動く映像」であろう。スチール写真の活用も、今後に大きな可能性を秘めている。映像メディアの開発と発展を考えると、結果的には、「動く」にこだわらなくてもよかったような気がする。

映像化の方法についても、学芸員の手づくりや外部委託の方法などが具体的に紹介されてためになったが、その目的となると、記録保存なのか、来館者・学習者への公開なのかという点が整理されないまま、同じ土俵で議論が展開されていた点が少々気になった。博物館においては、そのどちらの行為も重要な位置を占めているが、学術的価値を考えて対象を克明に撮りだめて保存資料化することと、学術的裏付けを持ちながらも、受け手に「効率的な」インパクトを与える作品として映像化することは対称関係にあるといってよい。漫然と撮りだめをした映像資料のいくつかの部分をつまみ食い的に編集しても、受け手が興味を抱く作品として完成するかは疑問であるし、作品に編集の際に裁ち落としたフィルムをつないでも、立派な保存用の映像資料となるとは限らない。

しかし、なにしろ初めて実現したシンポジウムであり、今後こうした点を整理しながら、それぞれの問題について具体的な討議を積み上げていく場として発展することを期待したい。現段階では様々な試みが繰り広げられるべき時で、「博物館における映像活用はこうあるべきだ。」と結論づける段階にはない。むしろ今回のシンポジウムの最大の成果は、学芸員と映画関係者が、それぞれのもつ「専門家」というプライドの壁に囲われた「井戸」から這い出して互いの意見を聞き、交流を深めたことであろう。博物館が委託方式で映画制作を行う例は今日では極めて多い。しかし、お互いの取組みが熱心であるほど、表面に現れない対立があったはずだ。現にそうした事例発表もあった。今、博物館や美術館の活動において、映像の技術とその活用が特段に重視されてきているという時流に即して開催されたシンポジウムだったといえよう。2回目の早期開催と、参加者の輪がさらに広がることを期待したい。

新たに取組検討の事業

日野市ふるさと博物館

地域博物館は研究機関であると同時に、市民の地域学習の身近な拠点としての機能を持たねばならない。日野市ふるさと博物館は、平成6年11月で開館5周年を迎えるが、この間企画展（年間1回）のほか、体験学習会、秋季講演会などを行うと共に、資料等の調査、収集なども積極的に行い、館の運営を一応軌道に乗せてきた。しかしその一方で、観覧者数は伸び悩みの状況にあり、新たに転入した市民の中には、博物館の存在を知らない方々もいる。こうした現状では地域博物館としての機能が十分に発揮されているとは言い難く、博物館の市民へのより一層の浸透をはかり、博物館を市民に有効に活用していただくための各種の事業を行っていく必要が生じている。そこで当館では「地域に密着した開かれた博物館作り」を目指して、次の1)～3)を主な柱とした各種の事業を今後展開して行く計画である。

1)地域への浸透をはかる

市民による博物館の有効な活用を促すためには、資料の収集や研究活動の充実も必要だが、それにも増して市民が博物館を気軽に活用できる環境作りが必要である。このためには当博物館は来館者を待つだけではなく、博物館の側から積極的に館外での活動を行うことを考えている。その具体的な事業として、市民の公共施設や学校の空き教室を利用した、巡回企画展の実施を検討している。この計画の背景には、日野

市は特に南北の交通の便が悪いために博物館を利用しづらい地域があるという立地条件や、企画展示室がないために企画展の開催に制約があるという、当館の施設面での事情もある。ともあれこの巡回展を通じて、市内のより多くの方々に博物館の資料に触れていただき、郷土に対する関心を高め、博物館の有効性をアピールしたいと考えている。

また博物館の活動を市民に逐一公表することをこれまでは行わなかった。しかし市民が博物館を有効に活用するためには、まず博物館の存在とその活動内容を知らなければならない。この点から、現在館報（季刊）の発行を準備しており、第1号は平成7年1月に発行する予定である。また市民の地域学習のための便宜をはかるために、レファレンスコーナーの設置を計画中である。

2)学校との連携の強化

現在の日野市内の学校による博物館の利用は、そのほとんどが小学校3年生の市内見学の一環として行われるにとどまっている。しかし実物の資料を直接見ることができることは博物館の「強み」であり、この博物館の持つ「強み」を学校教育の場にも生かすことはできないかと考えている。その具体的な事業の一つとして、当館では昨年度から空き教室を利用した郷土資料室の設置事業に取り組んでおり、現在では具体的な準備作業にとりかかっている。これは子供たちが実物の資料に触れられる機会を設けるという目的の他に、資料への接し方や博物館の利用のし方を学んでもらうという意味もある。ただ、このような事業を行うにあたっては、博物館側と学校側との連携がなければ、その目的は十分に達せられない。実際、市内見学その他で学校が博物館を利用する場合にも、館内での指導、説明は博物館任せという学校もいくつか見られる。このため博物館を学校教育の中で効果的に活用するために、教員を対象とした定期的な博物館見学会、意見交換会などを行いたいと考えている。

3)博物館活動への市民参加

当館では平成6年秋より市民参加型の講座を行っている。これは講座への参加者が受動的に講義を聴くばかりでなく、一研究者として、より主体的に行事へ参加できるよう配慮した講座であり、好評を得ている。この講座は将来の恒常的な研究団体の育成を目指したものであり、今後も同様な講座を開催することで、市民の側からの「博物館友の会」の結成を目指している。市民の地域学習の身近な拠点としての立場に立脚するならば、博物館の各種の行事に対して、市民が主体的に参加できなければならない。「博物館友の会」はその土壌となるもので、当館としては市民参加型の講座を足掛かりとして、市民の学習活動の補助役、あるいはコーディネーターとしての役割を担っていきたいと考えている。

以上の通り日野市ふるさと博物館の今後の取り組みは多岐にわたっているが、これらはすべて「地域に密着した開かれた博物館作り」のための方策である。当館としては、来館者を待って展示を見せる、というこれまでの枠組みから脱却し、地域博物館の持つ様々な可能性を積極的に追及していきたいと考えている。

檜原村郷土資料館

当館は、開館以来6年を経過しました。その為、展示写真の変色もあり展示替えを予定しています。

映像機器類がスライドであったり、音声もテープを使用しています。映像文化時代、ビデオ・レーザーデスク等に切り替えが必要と考えます。

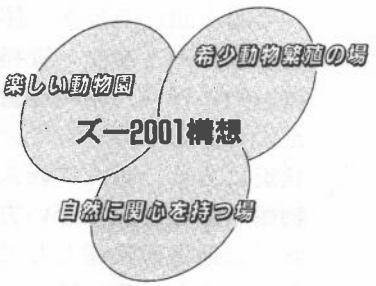
本年、山村の食文化を知るため「手打ちうどん」の講習・試食会を実施盛会を納め、今後も時期を見て実施をしていきたいと思います。

東京都井の頭自然文化園

館（園）の新たな取り組み等

井の頭自然文化園は、東京都の動物園としての機能を併せもっています。東京都の動物園では、平成3年度から平成12年度までの10年計画で「ズー2001構想」を実施しており、当園もそれに基づき、園が環境学習や希少動物の繁殖の場となるよう運営を検討しています。

また、当園には、近隣の方々が気軽に何度も訪れるという特色があります。展示や催しなどの企画では、こうしたリピーターにとっても新鮮味があるもの、園に親しみを感じてもらえるものを心掛けています。



博物館の連携の必要性

今回「ミュージアム多摩」を編集するにあたり、あらかじめ設定したテーマ「博物館の必要性」について各館に執筆していただきました。

八王子市郷土資料館

三多摩地域に所在する市町村域は、もともと律令制下の多摩郡。したがって、多かれ少なかれ、古代の様相は、各地で似たりよったりであり、当然、博物館の展示も共通してしまう。古代ばかりでなく、原始時代や、資料の乏しい中世前半でも、各館でそう差はないであろう。このことは、博物館展示のみでなく、市町村史の記述の中にも如実にあらわれており、一種の弊害だ。

そこで、同じ様になるのなら、これを逆手に、近隣博物館で共同で企画をたて、行政区画を越えた地域を広範に検討し、調査することによって、従来では予想できなかった効果を得ることが可能である。企画の予算・担当者を分担することによって、かなり多めの額ともなり、智恵もふくらもう。これを参加館で巡回展として公開するのである。

府中市郷土の森博物館

資料、スタッフ、予算などの面で、１館ではその目的を達するに困難なものを、三博協会員間の相互協力により共同で実施していく、そこに三博協の大きな存在意義があると思う。したがって展示、調査などの共同企画、共同調査など、積極的に三博協として取り組むべきと考え、ややもすれば機関紙の発行また総会、協議会の開催のみに止まっているきらいのある現状を、少しでも活性化できるのではないかと考える。

具体的には多摩川やハケといった統一テーマを設定し、各館の持つデータの提供そして共同調査、また展示（場合により巡回展）などが挙げられる。会員22館を数える三博協にあって、多摩川またハケを抱える館がいかに多いことか。これらが協力すれば、自ずと成果は生まれると思う。三博協は、多摩地域の博物館職員による研究会が、その母体となっていたことを、今一度思い起してみる必要があろう。

町田市立博物館

多摩地域における公立博物館は、考古や民俗資料などを収蔵する共通点があるので、連携しやすい部分を持っていると言える。もちろんこの分野に限らず、展覧会企画、調査、研究など協力しあうことで大きな成果が得られるならば、積極的に進めていった方が良いと思う。しかし実行するにはクリアーしなければならない問題があるので、それらを列挙してみると（展覧会〔巡回展〕を共同企画した場合に限定）

① 展覧会を開催する意義（必要性）
② 展覧会を開催することよって得られる共通の利益
③ 同等の展示スペースの確保
④ 開催館の距離的問題（近すぎてはあまり意味がない）
⑤ 予算の問題
⑥ 調査・研究の段階での役割分担（原稿執筆も含む）

などを挙げることができよう。今までお互いに共同で事業を展開する機会がなかったが、今後三多摩公立博物館協議会がさらに発展していく一つの方法と言えよう。

調布市郷土博物館

多摩川はその流域に位置する博物館にとって欠くことのできないテーマの一つで、各館とも展示その他の活動で様々な取組みがなされており、当館でも多摩川の自然調査ならびに映像記録などを継続的に進めている。ただし、多摩川は、流れとともにその表情や流域との関わりを変化させているのに対し、我々の取組みは行政区画を単位とした活動にとどまることが多く、いわば多摩川を胴切りにして関わっている状態ではないだろうか。

そこで多摩地域にとって母なる川である多摩川を、分野にとらわれず各々の立場から情報の交換や学習会を行って全体像の把握に努め、やがてはその成果を各館が分担して活動に生かし、全体像の上に立った各地域の個性を表現できればと考える。

福生市郷土資料室

展示の共同企画は、当市のような小規模館（組織・予算）では館運営をよりダイナミックなものとする有効な方策と考えています。当市ではまだこれを具体化するまでに検討が進んでいませんが、この「共同」が安直な「タダノリ」的なものにならないよう、主体性を維持し、実施できることが重要だと思います。当市で５年度に行った自然石舟形光背浮彫像墓標の展示は、市内の墓石調査の成果を展示したものでした。

秋川源流三頭山に産出する御影石を用いた近世前期の当該墓標が何故多摩川川付きの福生市に数多くみられるのか、これは近世の流通、石工技術、分布、宗教、民俗信仰等様々な問題を提起してくれました。しかし、これは少なくとも多摩川流域全体を視野に入れて実施しなければ解明できないものであり、共同調査の必要性を感じました。

武蔵村山市立歴史民俗資料館

連携の方法についてはいろいろな形があろうと思います。職員レベルでは館長、事務担当、学芸とそれぞれ意見交換の機会があってもいいと思います。また館運営レベルでも資料収集保管、普及活動、調査研究、事務、施設管理など一つテーマをもって全体で検討する機会を持つことも考えられます。

しかし、正直なところ当館のように小人数（２名）で館運営の他に文化財保護業務を担当していると三博協の会議に出席することすらままならない状況です。まずは簡単にできることから始めてはどうでしょうか。各館の事業を一覧で季節ごとに紹介するようなパンフレットを作成し、三博協のＰＲを図るのはいかがでしょうか。

五日市町立五日市町郷土館

以前私たちの館では、不足する収蔵施設の問題から、周辺自治体で民具資料などを分割所蔵することができないかという議論をしたことがある。その時は、分割所蔵の割合が高くなるにつれ、館が専門化され研究は深化するが、地域博物館としての役割の低下に繋がらないか、また輸送コストがかかり、損傷等の危険もある博物館資料はこのシステムにそぐわないのではないかと結論づけてきた。しかし収蔵スペースの問題としてではなく、博物館資料の情報提供の中で考えてみることができないだろうか。ものを移動するのではなく、ものにかかわる情報を移動、あるいは共用すればいいのである。現在各館で独自にコンピューター化されており、オンライン化は遅きに失した感があるが、相互に情報を提供しあえる「博情館」化する必要を感じている。

羽村市郷土博物館

今後の行政の広域化を睨み、各館の連携が求められるところである。そこでFAXなどを活用したネットワークの構築による情報の交換と、これらの情報の蓄積・検討を連携の第一歩として提案する。予算・人員の問題を最小限におさえた効率的な活動として、各館の状況が把握できるこうした活動は有効かつ比較的早期に実現可能ではないだろうか。ここでは、事業内容や資料情報などの交換を目的とする。まず、数館で試験的に実施して方法・形式を検討し、その後で徐々に定着を図ってはどうか。このネットワークを基にして、事業の共同開催、オンライン化等の大規模な計画の共同研究など、より密接な連携の可能性も探れるのではないだろうか。連携の問題を話し合う研究会等を設けることも必要であろう。

清瀬市郷土博物館

すでに命題となっていますが、地域の歴史文化を見ていく時、自治体の行政単位という括りでは解決しえない場面に度々直面します。共同研究等の必要性を感じてはいても、それぞれの館では運営方針が異なり、人員を共同事業に確保出来るところは少ないと予想されます。もし実際に行うとしても恒常的に情報を取りまとめ発信していく中枢機関がまた必要になります。

当館の場合は基礎資料の収集と整理がまだ立ち遅れている状態であり、先ず資料を充実させ提示していかなければなりません。地域博物館の利点は地域の状況に即した微細で柔軟な観点からものをとらえることが出来ることです。きめ細かい基礎資料の充実こそ研究者や利用者に成果をもたらし、ひいては博物館間の相互協力を可能にするものと思われます。

立川市歴史民俗資料館

最も実現性の高い連携事業は巡回展示であろう。

手持ちの資料による展示内容の限界、限られたスタッフ…。これらを考えると、それぞれが独自に展示を考えているより、複数で特別展を計画し、それを巡回させれば互いのメリットは大きい。展示に向けた調査・研究も広域的に進む。これらは、「多摩」を大きくとらえるものとして蓄積されていくだろう。

その必要性を議論する時期は過ぎたと考える。２館でも３館でも、できるところから、無理のないやりかたで、ともかく始める時期なのではないか。

平成７年は終戦50周年にあたる。計画をしている館があれば、集まって一緒に計画してはどうか。

三博協は、こうした打合わせ・調整の場として最適であると思うし、今後こうした役割を担っていってほしいと願っている。

檜原村郷土資料館

当館には、学芸員・専属職員もいない為、展示・調査など共同調査企画は必要ですが、現状管理だけで（いわば留守番!!）過ごしています。今後の課題としてください。

日野市ふるさと博物館

多摩地域の地域特性を明らかにすることは意義深いことであり、このためには博物館の連携が不可欠だと思われる。

博物館間の連携の方法としては、共同企画展や共同調査なども考えられるが、その前提として「資料の共有化」が必要なのではないだろうか。つまりどこの博物館にどのような資料があるかが即座に検索でき、その資料がスムーズに貸し借りできるような体制作りである。具体的にはオンラインなどを利用した博物館相互の情報検索システムなどの導入を検討しても良いのではないだろうか。

このような「資料の共有化」によって多摩地域の個々の博物館が一つの博物館としても機能することで、より多彩な展開が可能になるものと考えている。

東京都井の頭自然文化園

井の頭自然文化園は、生きた動植物を展示している施設であり、連携は難しいように思われます。

逆に、その特色を生かして、共同の企画で展示をするのも面白いかもしれません。

今までの展示 これからの展示

東村山市立郷土館

2年後をめざして新たな郷土館を準備中
館のテーマは「みち」

東村山市の郷土館は、昭和40年のオープンで、多摩地区でも最古参を誇って？いました。しかし寄る年波には抗せず、数年前から新たな館の準備をしています。

当市は財政基盤が脆弱にもかかわらず、交通の便に恵まれていることから土地の値段も高く用地難に苦しんだ結果、「都営住宅との合築」という、博物館施設としては多摩地区では初めての試みに挑戦することとなりました。多くのデメリットは承知の上ですが、それらを逆手にとって、いかに独創的な館運営を行うかいまから頭を悩ませています。

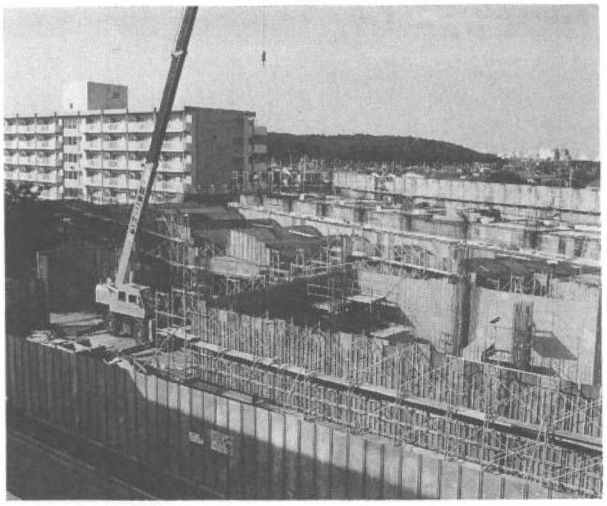
いま多くの博物館施設が建設されつつあり「一市一館」ともいえる状況になりつつあります。

高齢化社会・生涯学習時代を迎え、地域の人々に多様な「場」を提供することが求められるこんにち、このことは歓迎すべきことといえます。しかし、こうして身近に博物館施設が整ってくると〔どこに行っても同じネ〕とならないよう、館側の努力がますます求められるようになっています。

関係者が「百も承知！」というこのことを現場の実践のなかで解決していくためには、多摩地域各館の一層の交流が必要ですし、私たち東村山はお隣りの所沢市をはじめとする「狭山丘陵」をめぐる埼玉県の仲間との交流も必要だと思っています。

そうした観点から今後の交流を考えてみると、この「三博協」のはたす役割がますます大きくなってくると思います。各館それぞれ十分とはいえない人員の中で、運営に努力しているわけですが、現場学芸担当職員の交流の場がもっと広がればと思います。

お互い学び合うということが大切ですが、私たちが考えたことは他の館を「利用してやろう！」ということです。私たちの館はまだまだ多摩地域の仲間に何かを提供することを考えるゆとりはありません。しかし、他の館に学び、その良いところを参考にすることはできるはずです。そんなところから交流を始められればということです。



さて、私たちの計画している館は「みち」をテーマに設定しました。

東村山は奈良時代末と推定される「瓦塔」や中世の「元弘の板碑」または「正福寺地蔵堂」など特徴ある文化財を残していますが、それらはいずれも「東山道武蔵道」や「鎌倉街道」が当市を通過していたことと無縁ではないからです。

また近世に入ってからも、狭山丘陵南縁を通って江戸へと向かう青梅街道をはじめとする諸街道や、新河岸川水運を利用する青梅・志木街道の存在など多くの「みち」の存在が指摘できます。（もちろん当市だけを特徴付けるものではありませんが）さまざまな「みち」の在りようから東村山市を見てみようと考えた次第です。

資料の不足するなかで試みる「通史展示」は率直にいって苦しいものもありますが、先進館の成果を参考に、今後さらに詰めていきたいと考えています。

三博協の皆さんのご指導をお願いします。

奥多摩郷土資料館

＊収蔵品展（２階）

６年４月～７年３月　奥多摩湖の湖底に沈んだ、小河内の山村生活用具（国指定）を中心に展示。

６年４月～７年３月　奥多摩で見られる蝶の標本を展示。

７年１月13日～31日　正月飾りの門棒、まゆ玉飾り。

＊小河内の郷土芸能（１階）

６年４月～７年３月　湖底に沈んだ小河内地域に伝承されている国指定重要無形民俗文化財の鹿島踊り、都指定無形民俗文化財の車人形、獅子舞、神楽を展示。

６年４月～７年３月　奥多摩に数多く伝承されている「ささら獅子舞」の中から大丹波の獅子舞、原の獅子舞を展示（１階中央展示室）。

※郷土資料館の庭には、花木がたくさん植えてあり、四季折々に彩りを添え訪れる人を楽しませてくれている。

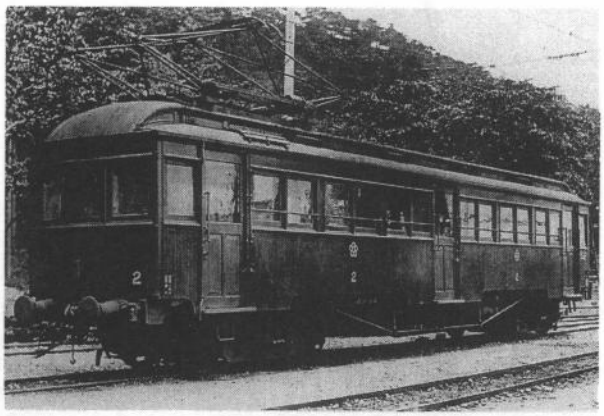
ここには、小河内ダムの湖底となる前に移された碑や石仏がたくさんあり、往時のようすが伺える。

青梅市郷土博物館

・開館20周年記念特別展『青梅鉄道 100年展』
（平成６年６月21日～９月25日）

青梅鉄道は、明治27（1894）年11月に開通し、現在、JR青梅線として今年で100周年を迎えました。この青梅鉄道の開通は、織物・木材・石灰石など地元産業の発展に大きな役割を果たし、また、多摩川流域の交通史を見るうえでも重要な位置を占めてきました。

この特別展では青梅鉄道に関する品々を市民の皆様からお借りし、「青梅鉄道のはじまり」、「開通後の青梅鉄道」、「青梅鉄道と石灰山開発」などのテーマに分けて、写真や時刻表、観光ポスターなど100点前後の資料を展示しました。



青梅鉄道電車

・企画展『むかしの暖房器具展』
（平成６年12月20日～平成７年２月26日）

暖房器具は、冬のくらしに欠かせない大切な生活用具です。

わが国では、屋内を暖めたり、食物を調理するため囲炉裏が古くから用いられてきました。さらに、囲炉裏や、竈の消し炭などを火種に利用し、火鉢や炬燵などの暖房器具が生み出されました。

この企画展では、館蔵資料を中心に、火鉢や炬燵をはじめ、懐炉や電気ストーブなど、いろいろな暖房器具を展示します。

・『新収蔵品展』

この展示は、市民の皆様に資料の収集活動という博物館活動の一端を御理解いただくとともに、来館者の方々に新しく収蔵された資料を御覧いただくため開催しました。

今回の展示では、平成５年度に寄贈いただいた資料のうち主なものを２期に分けて展示しました。

今後、寄贈いただいた資料は、翌年度の「新収蔵品展」に展示し、多くの方々に御覧いただきたいと思います。

八王子市郷土資料館

八王子空襲から50年－来季特別展について

来年、平成７年（1995）は、太平洋戦争の終戦から50年をむかえる節目の年になる。おそらく各地で戦争やそれに関連する展示活動が数多く行われることは必定である。

八王子市は、昭和20年の終戦間近の８月２日未明、Ｂ29爆撃機の大編隊による空爆を受けた。主にM16と呼ぶナパーム系の焼夷弾攻撃であり、市街地は、瞬時にして火災となり、まさに火の海と化した。

この状況を写した写真があるが、どうもそれは、遠景でありすぎ、静かな炎が起っているように見えるだけで、その下で灼熱地獄が展開されているようには思えない。

また、右に掲げた、同年10月に撮影された焼き尽された市街地の写真では、今では考えられないような澄みわたった空気と虚脱感が良く伝わるが、どうも悲惨な事件の現場であることを一瞬忘れる。

このように、戦後半世紀の時の流れは、記憶の薄れとともに、事実の本質を見失うことを促進させるようだ。

日本は、日支事変から太平洋戦争にいたる15年戦争において、唯一沖縄戦をのぞいて、自ら

の領土内で戦闘することがなかった。それが、サラエボ内戦のような本当の戦争の恐ろしさを知らない国民を育てたと言えるかもしれない。戦争体験の風化の早さや、その本質を容易に忘れることは、それに起因しよう。

その点、空襲は、直接、戦争相手から市民が攻撃されることで、軍隊同士の戦いとは区別され、状況は異状である。東京・大阪空襲をはじめ、日本各地に加えられた空襲は、長い15年戦争の、終幕にやってきた強烈な鉄槌であった。最も迷惑を蒙ったのは国民大衆であった。今回の展示方針は、この苦痛を受けた市民からの検証を主題としてみたいと考えている。

羽村市郷土博物館

当館では毎年2000点を超える資料の寄贈を受けている。特に今年は12月現在で約4000点にのぼる資料の提供があった。これらの資料を活用し、同時に館の活性化を図るべく、寄贈資料を中心にした企画展に力を入れている。今年度は特別展を含めた６回の展示について、寄贈資料をベースに季節の行事やくらし・時代などのテーマで企画し、これまでに特別展「職人のわざ－羽村に伝わる道具と技術」・野鳥展・生活用具展を開催した。この後は、

’94寄贈品展（12月10日～１月22日）
まゆ玉飾り（１月７日～１月15日）
ひな人形展（２月１日～３月５日）

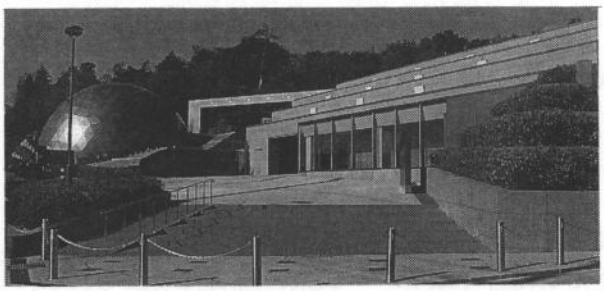
を予定している。開催期間中は展示以外にもイベント的な事業を加え、動きのある企画を目指している。生活用具展では、蓄音機の演奏、特別展では期間中の毎週末、６職種17回にわたり職人の実演を行った。また、実演とその準備を通して、道具だけでなくそれを製作する技術、使う技術の記録・保存に留意し、資料の活用を図った。まゆ玉飾りは体験学習会と連動させ、参加者が作ったまゆ玉飾りを展示する。こうした変化をつけることで、期間中に２度、３度と来館いただく方も多い。

寄贈資料のうち約3000点については特別展にかかわる職人関係資料であった。これらはほとんどが、展示を見たり、調査活動を通して博物館の資料収集に理解をいただいた結果であり、企画展の効用といえよう。ある程度館の活動が市民の間に浸透しつつあり、博物館を身近に感じていただいているのではないかと考えている。市民の方々の来館・再来館を促すと同時に、資料寄贈者との連絡を保ち、市内の資料の情報を収集する機会として、また館に対する要望・意見を伺う場として、これら企画展を今後も積極的に活用していく方針である。

さて、昨年から青梅線開通100年を記念してさまざまな催しが行われている。当館でも青梅線開通をテーマに、２月18日～３月26日の日程で展示を企画している。青梅線開通に携わった指田茂十郎・下田伊左衛門の残した文書を中心に、玉川上水の通船から青梅線開通、そして現在までを資料と写真でたどる予定で、現在広く市民の方に情報提供を呼びかけている。

はじめまして！ 博物館!!

東大和市立郷土博物館



所在地　〒207 東大和市奈良橋1-260-2
TEL 0425(67)4800 FAX0425(67)4166
入館料　無料
休館日　月曜日、年末年始
（祝日の場合は開館し、翌日を休館）
開館時間　午前9時～午後5時
＊ プラネタリウムがあります。観覧料はおとな200円・こども（小中学生）100円です。

今年4月、東大和市の狭山丘陵の一画に郷土博物館がオープンしました。

東大和市は、都心から35キロ離れた所に位置し、北は埼玉県所沢市に接しています。

その所沢市と接する丘陵地帯に大正2年から10年間をかけて多摩湖が作られました。

多摩湖は、3.1平方キロに及び東大和市全体の4分の1を占めています。春の桜、夏木立、秋の紅葉と市民はもとより、都民の憩いの場ともなっています。

郷土博物館のテーマは「狭山丘陵とくらし」です。狭山丘陵の雑木林と東大和の人々のくらしは深く関わってきました。そこで、東大和の歴史、民俗、丘陵の自然の3本の柱をテーマに展示を表現しています。そして、郷土博物館の建物だけでなく、館の周囲に広がる丘陵・緑地も博物館として学習の場に活用していくことを考えています。

館は、中2階のある2階建てで、面積は約2,880㎡です。玄関を入るとホールになっています。このホールは、それに続く企画展示室と一体になって、ギャラリーにもなります。

中2階には、ビデオ装置があり、自然、歴史、科学など各分野から来館者が自分の好みに合わせたビデオを選んで見られるように、70本ほどの番組を用意しています。

2階には常設展示室と情報サービス室があります。常設展示は、館のテーマに沿って歴史、民俗、自然のものを展示しています。東大和市にとっては、多摩湖の建設とともに、昭和20年4月にあった米軍のB29爆撃機による空襲も大きな事件です。これらを中心に展示してあります。また、昔あそびなどが体験できる体験コーナーもあります。

館には、14mのドームをもつプラネタリウムがあります。プラネタリウムの一般投影では、市の紹介映画、春夏秋冬の季節に合わせた星空、全天周映画を行うほか、保育園や幼稚園児向けの番組や小中学生のカリキュラムにあわせた番組を用意し、役立てようとしています。郷土博物館が市民の学習の場として、活用されることを期待しています。また、今後は体験学習室を建設し、さらに活動の幅を広げていきたいと考えています。

（概要）総面積 2,878㎡、常設展示室 468㎡、企画展示室 114㎡、プラネタリウム 14m 120名 329㎡，ビデオコーナー 52㎡、情報サービス室 64㎡、会議室 58㎡、収蔵庫 323㎡、総事業費 43億円（用地費　12億円、建設・設備費31億円）

奥多摩町森林館

（平成6年10月1日開館）

日本は、国土のおよそ67%が森林で、人々はくらしの中で森林と深くかかわってきました。森林は、人間ばかりでなく、けものや鳥や昆虫たちにとっても自然の恵みの宝庫です。

奥多摩町は、東京都の10分の1という広い面積を有し、94%は山林に被われ、全体が秩父多摩国立公園の中にあり、澄んだ空気と豊かな緑に包まれた美しい町です。

奥多摩町は、国際花と緑の博覧会で新日本名木百選に選ばれた「倉沢のヒノキ」や都天然記念物の「古里附のイヌグス」「氷川の三本杉」など多くの巨樹巨木が、祖先から受け継がれてきています。

これらの巨樹巨木を通して、快適な生活環境と緑豊かな国土を創造するため「人と樹木との共生」について、学び考える場を提供するものです。

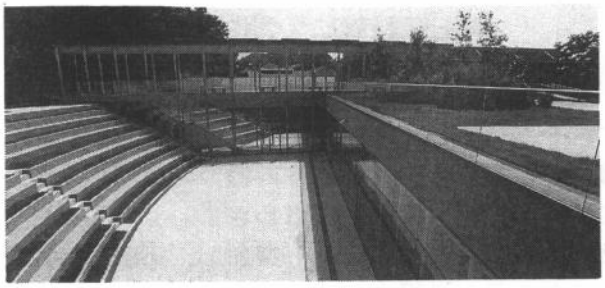
館内案内
①種別日本一ベスト25　②巨樹の話
③奥多摩の巨樹　④奥多摩の生いたち
⑤巨樹を守る　⑥東京都の巨樹ウオッチング
⑦パソコン検索全国巨樹めぐり
⑧カモシカウオッチング（望遠鏡で森林館対岸の山にでるカモシカが観察できます。）
⑨レクチャールーム（映像：巨樹の心）

森林館は町の巨樹のみでなく、将来的には巨樹に関するデーター等の情報発信基地として整備していきます。

所在地　〒198-02 西多摩郡奥多摩町日原819
名　称　奥多摩町森林館
電　話　0428-83-3300

くにたち郷土文化館

所在地　〒186 国立市谷保6231
TEL 0425(76)0211 FAX 0425(76)0216
入館料　常設展示は無料
（企画展・特別展については別途設定）
休館日　毎月第２・第４木曜日、年末年始
（祝日の場合は開館し、翌日を休館）
開館時間　午前９時～午後５時
＊　講堂・研修室等が有料で利用できます。



くにたち郷土文化館が平成６年11月に無事オープンしました。紆余曲折はありましたが、なんとかここまで来れたのは、ひとえに三博協の諸先輩方のご指導があってこそと痛感しております。まずもって、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

１．開館までの経過

わが市にもぜひ歴史と文化について、体系立てて調査、研究し、展示できる場がほしいという市民要望をふまえて、平成元年10月に教育委員会が「郷土文化施設基本構想」を策定しました。これをもとに、床面積2,000㎡の規模で、常設展示室、企画展示室、収蔵庫、講堂、研修室等をもつ博物館機能を前提として、施設計画が進められました。

その後、建築基本設計（平成２年３月完了）、同実施設計（平成４年３月完了）を行い、続いて展示基本設計（平成４年３月完了）、同実施設計（平成５年３月完了）を行いました。この間については、どうすればよりよい施設にできるかをめぐって、さまざまな議論と検討がなされました。また、先進市町村の博物館、資料館を幾度となく見学させてもらい、お手本にさせていただきました。

そして、本体建設工事が平成４年９月～６年３月（19か月間）、展示工事が平成５年５月～６年７月（15か月間）の工期で行われました。

２．施設の特徴

この施設は、武蔵野の面影を残す谷保地区の青柳段丘に面して、敷地面積約3,636㎡、延べ床面積約2,181㎡の規模で立地し、周囲の景観を損なわないために、建物の85％が地下にもぐり、地上部分は15％だけという一見変わった構造になっています。

地上部分はエントランスホールと多目的ホール、搬入ピロティーからなっています。ガラス張りのエントランスホールから一つの展示空間にしたいとの考えから、自然木の床面には、所々に国立の自然を映し出すモニターが配置され、或いはこの場所から発見された縄文土器の復元ジオラマや、清流の自然が残る矢川の模型などが埋め込まれています。これらを見ながら進むと、樹木が生い茂る南養寺の森に向かっていきます。

そして、地下部分に下りると講堂、研修室、資料・研究室、常設展示室、特別展示室、収蔵庫が配置され、中央に歴史庭園が広がっています。こちらも前面がガラス張りになっており、地下を意識させない、開放的な空間となっています。このように構造的にも、地下方式でガラスを多用するという新しい試みが、うまい具合に調和している建築が特徴といえます。また、歴史庭園は野外展示空間と考え、この地から出土した縄文時代の敷石住居を復元しています。

３．郷土文化館のテーマ

国立市の地形は、古代の多摩川が形成した３つの河岸段丘から成っており、原始、古代から現在に至るまで、人々の生活もこのハケを中心として営まれてきました。このことをふまえて、「多摩川が育んだ段丘（ハケ）とともに生きるわたしたち」を基本テーマとして、「歴史・文化・自然を横軸に、過去・現在・未来を結ぶ－郷土文化館」をめざしています。

展示の構成は、ハケの自然ゾーン、歴史ゾーン、都市ゾーン、くらしゾーン、エントランス、歴史庭園からなり、なるべく実物を身近に見れるように構成しました。また、南養寺遺跡や甲州街道、国立駅舎の復元模型や、マルチビジョン、映像モニター、環境音楽などにより、立体的な空間構成としました。

４．今後の方針

施設の管理運営は、くにたち文化・スポーツ振興財団が行っていきますが、調査、研究、保存などを行ったり、市民の体験学習や伝統芸能の発表など、様々な利用ができる場になればよいと思います。また、活動については、歴史、民俗資料や自然について、新しい発見を常に求めながら、研究成果を随時展示して行けるように考えています。

今後とも、皆様のご指導をよろしくお願いいたします。

瑞穂町郷土資料館

郷土資料館にて思うこと

瑞穂町に郷土資料館が昭和52年11月に開館して、今年は満17年となります。光陰矢の如しとはよく言ったもので、月日の経つのは早いものです。この間、町の発展はめざましく、人口は２万人台から３万人台へと増加し、正確には平成６年９月１日現在32,543人となっています。このように町は人口に比例して発展し、そして、１日々々変化していくのに対して、資料館の姿は開館当時とそれ程変わっていません。そのことは、理由を書くまでもなく開館してから以後、増改築など資料館内部の模様が変わっていないということです。資料館には成長がなければなりません。進歩もなければなりません。それは人間の歩む過程と無縁では決してないのです。

何故遅々として資料館の歩みが見えて来ないのかと考えると、資料館という「容れ物」のことがあります。最初から単独して資料館のみの施設ではなかったこと。いうなれば、施設建物が独立で機能できないことにあったと、ひとり決めています。昭和48年８月１日に開設された町の図書館の附属のように、既設の２階に３階を増設して作られた経緯もさることながら、図書館と同居することに、多少なりとも運営を阻害する要素がないとはいえないのです。けれども、このことは、今もって不満の材料でもなければ、非発展性の要因などと思ってもいません。そこで、ひとつ工夫した点をあげれば、入館が図書館の表玄関からであっても、資料館への誘いも考えて、前庭に石造物や穀倉を建てました。石造遺物は町内の区画整理や道路整備で、移転を余儀無くさせられたもので、庚申塔、馬頭尊、道標石など。また、穀倉は農家からの寄贈で、内部の板に「㊐時天保七甲申年六月吉日」と墨書紀年銘があって、教育委員会・文化財保護審議会が力を入れて復原移設した建造物です。

３階の資料館への入館者は、どうしてもこの図書館内の一部、玄関から階段への僅かの所を通行しなければなりませんが、来館者は資料館のみの見学目的者と、図書館利用目的の来館である二次的目的者に分けられます。その割合など計算したこともありませんが、年間、あるいは月別の入館者数も、時期によって小・中学生の団体見学があるので、特に平均見学者数についての記録はとっていません。

常設展示は主として開館当時そのままを生かし、展示ケースは時に入れ替えをし、変化を与えています。展示大ケースは、すべて特別展用にあてていて、年１回の長期特別展の場として使用しているところです。この年１回の特別展は、11月初旬の町総合文化祭への参加行事で、年々趣向を凝らせた文化財展等を、テーマを定めて実施します。この場合、総合文化祭とタイアップさせるわけですが、その期間は文化の日も含めて、独自の期間を設定しています。この特別展は、文化祭終了後も、一部借用展示物は返却しても、若干の展示替えに止めて、その年度内まで展示していくものです。あとは、その年度の途中で実施する企画展で、時には期間を短縮した特別展も開催します。

資料館の展示はその館の生命を決定づけるものです。よって常に調査研究と、町民や他地域からの見学者の要望に応える心掛けが肝要です。そのために、どうしても三博協をはじめとする、他館からの援助も仰がなければならないと思います。従来から、近隣博物館や資料館とは密接な連絡・情報交換を保ってきたつもりですが、今後はさらにこの点を強めていかなければと考えています。

資料館の運営や発展にあたっては、困難な条件が多々ありますが、将来の夢として広く開かれた生涯学習の場としていきたいのです。そして誰でも学べる資料館・図書館に間借をしない単独のミュージアムの設計建設を心に描いて、さらに今を大切に前進したいと思っています。

編集後記

情報提供施設でありながら、各館間の情報交換、また職員間の情報交換を考えなくてはいけませんね！（福）

博物館の連携についての企画が三博協の活性化につながればと思います。（武）

「博物館の連携の必要性」が紙面に載っただけではなく、実践の第一歩であることを望む。（五）

阪神大震災では確かで早い情報が求められた。博物館にもネットワーク化が必要なのでは？（羽）

発　　行：東京都三多摩公立博物館協議会
〒183 府中市南町６－82 府中市郷土の森博物館内 Tel 0423(68)7921
編集委員　福生市郷土資料室・武蔵村山市立歴史民俗資料館・五日市町立五日市町郷土館・羽村市郷土博物館